

名古屋 文化情報

2024

Winter

No. 408

NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery / 名古屋画廊

随想 / ちくさ正文館書店本店店長 古田一晴さん

この人と... / 「七ツ寺共同スタジオ」元代表・演劇プロデューサー 二村利之さん

視点 / 「バレエ王国・名古屋」再興へ 期待膨らむコラボ公演

#zoom up / 常磐津奏者 常磐津綱鵬さん



2024

Winter

表紙

「全身と指先」

(2021年/H201cm×W136cm/シルクスクリーン、ゴムシート)

多視点で撮影した写真から、物の立体データを得るフォトグラメトリーという技術を使い版画作品を制作しています。純粹に形の情報だけを捉えることで、いかに我々は表面に翻弄されているか、という事実を示したいと考えています。



よしおかとしなお
吉岡俊直

- 1995年 京都市立芸術大学美術学科版画専攻卒業
- 1997年 京都市立芸術大学大学院修了
- 2001年 VOCA展(上野の森美術館)
- 2006年 名古屋市長賞奨励賞受賞
- 2022年 第3回PATinKyoto 京都版画トリエンナーレ2022 大賞受賞

ウェブサイト <https://photogrammetry.work/>

Contents

Pick Up Gallery 名古屋画廊…………… 2

随想 ちくさ正文館書店本店店長 古田一晴さん…………… 3

この人と… 「七ツ寺共同スタジオ」
元代表・演劇プロデューサー 二村利之さん… 4

視点 「バレエ王国・名古屋」再興へ
期待膨らむコラボ公演…………… 8

#zoom up 常磐津奏者 常磐津綱鵬さん…………… 10

「なごや文化情報」編集委員

- 杵屋六春 (長唄・唄方 名古屋音楽大学講師)
- 桐山健一 (舞踊・演劇ジャーナリスト)
- 黒田杏子 (ON READING)
- 鈴木敏春 (美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事)
- 濱津清仁 (指揮者)
- 望月勝美 (編集者・ライター)

Pick Up Gallery

名古屋画廊



父である故・中山一男が終戦3年前に名古屋初のギャラリストになってから今年で81年目です。名古屋市役所を結核で退職し、一度は死を宣告された身ゆえ、「今度は本当に自分の好きな道を」と。その後、戦後の混乱期もしのぎ、役所と異なる、いわば嗜好品の世界でも必死にやれば何とかかなりそうだと思ったそうです。美術品はどんな時代でも需要ゼロにはなりません。さまざまに活路を見出し、良き美術品を提供していけば画廊はつぶれません。いま美術不況なのは日本だけ。しかし、そのような時代でも県内にはときおり新しい画廊が誕生しています。ギャラリストなりに皆で当地の美術文化をいっそう盛り上げたいと思っています。

鬼頭鍋三郎《画廊にて》1951年、12F、油彩、キャンバス
※栄のビル3階。廊下もギャラリーとして使用。

設立 1942年 代表取締役 中山真一
住所 〒460-0008 名古屋市中区栄1-12-10
電話 052-211-1982

取り扱い作家 笠井誠一 ほか多数
ウェブサイト <https://www.nagoyagallery.co.jp/>

随想

読書環境の悪化に歯止めを。



ちくさ正文館書店本店店長

ふるた かず はる

古田一晴

1952年名古屋市生まれ。74年にちくさ正文館書店にアルバイトとして入社して以来、本店に勤務。大学を卒業した78年に正式に入社し、現在に至る。2023年7月ちくさ正文館書店閉店。

2023年7月末、ちくさ正文館書店本店は最終営業を終了。6月末に閉店を正式発表してからは、日を追うに従い急増する、長く支えてくださったお客様からの熱いメッセージに感謝する日々を過ごした。それと並行して、業界誌、マスコミ等からの取材が集中。同じ紙媒体なので、出版界の縮小（例えば雑誌はピーク時の97年比で30%強程度の売上）は共通の危機感であり、シリアスな論調にならざるを得なかった。先日、文部科学省が公表した「21世紀出生児縦断調査」の21歳を対象にした読書調査に失望した。月に1冊も書籍を読まない層が62.3%（ちなみに1冊のみと答えた人を加えると82%にも上る）。電子書籍ではそれを上回る78.1%が1冊も読んでいないとの回答だったのは意外であった。出版界の苦戦に対する希望と思われる電子書籍だけに、未来の展望をどこに求めればよいのか、暗たんたる結果であった。

私はアルバイトの数年間を合わせて、約50年ちくさ正文館書店本店に在職。閉店前後、脳裏に様々な時代の局面が去来する。しかし、接客時のエピソードや、自分が携わった企画など、すでに思い出と化している遠い記憶を総動員して、いくら自分のことを語っても納まりがわるい。私は閉店作業に追われ肝心なことに気付かなかった。創業者の故・谷口暢宏社長がなぜ1961年12月に人文書・文芸書の専門店を開業したのか。開店当初の記録写真

は知ってはいたが、改めて見直してみる。そこに写りこんでいたのは「筑摩書房ブックフェア—人間としてその根源的問いの中から」「日本の詩歌」（中央公論社）「太陽」（平凡社）「現代日本文学館」などの案内看板。店正面入口上の壁面に大きく展示されている。店内右壁面の棚の一部は11段にもおよび、三島由紀夫の『暁の寺』（新潮社）も確認できる。それに比べ雑誌コーナーは見当たらず、雑誌は散見するのみ。1954年に雑誌の売上が書籍を追い抜き、1975年～78年を除き、2016年に再逆転するまで、出版界は雑誌の大きな伸長で経営が安定し、書店は支えられてきた。生家が正文館書店（名古屋市東区東片端町・1918年創立）という環境を考えれば谷口社長がそれを知らぬわけがないのに、雑誌は「世界」（岩波書店）だけでよいという谷口社長の逸話が残っている。おそらく何年も前から店の構想を練っていた熱い想いが、その写真から伝わってくる。生前に直接聞いておくべきだったと悔やまれてならない。

かつて谷口社長が発行していたPR誌の「千艸」第7号は、正文館書店から「古今和歌集新釈」（1929年）をはじめ6冊を刊行した国文学者山崎敏夫先生の特集号だった。塚本邦雄先生、桜井好朗先生が寄稿されている。谷口社長の理想の本屋像が垣間見られる。

この人と...



「七ツ寺共同スタジオ」元代表・演劇プロデューサー

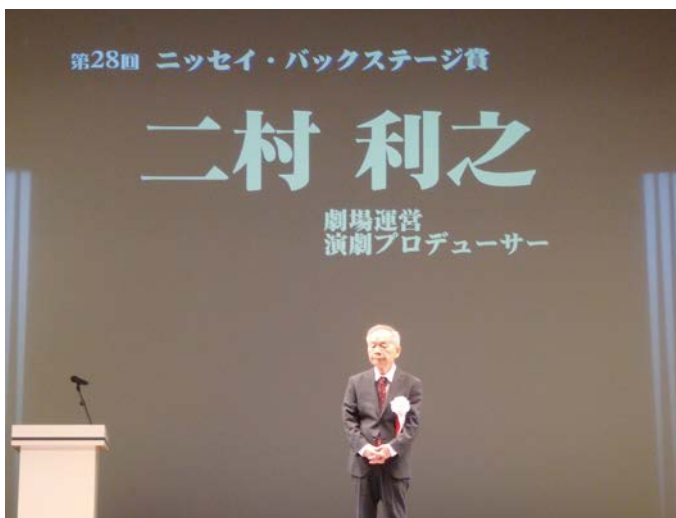
ふたむらとしゆき

二村 利之さん

いしずえ
名古屋小劇場演劇界における礎的存在

半世紀以上にわたり小劇場演劇のメッカとして全国的にもその名を轟かせてきた、名古屋・大須の小劇場「七ツ寺共同スタジオ」。その創設者として、あらゆる表現者に“開かれた場”を提供し、支え続けてきた二村利之さんは、その功績が認められて昨年、第28回 ニッセイ・バックステージ賞を受賞した。折々の事象や人を見つめて思いを綴り、数多の表現活動と伴走してきた長き道のりを、インタビューで振り返る。

(聞き手:望月勝美)



2022年11月29日、東京・日比谷の日生劇場にて行われた
第28回 ニッセイ・バックステージ賞授賞式の様子

“劇場主”として歩んだ、40年に及ぶ道のり

夕刊紙の名古屋タイムズ（以下、名タイ）の記者などを経て、二村さんが6人の有志と共に「七ツ寺共同スタジオ」（以下、七ツ寺）を立ち上げたのは1972年のこと。その歴史は今年、2023年で51年目を迎えた。「自由な、開かれた表現活動の場を」と掲げた目標通り、演劇や舞踏、パフォーマンス、音楽、映画、映像など多様な表現者たちに活動や交流の場を提供してきた。当初は政治・社会問題の集会や講演会も多く催されたが、同じ頃全盛期を迎えて

いたアングラ演劇（※1）や、80年代の小劇場演劇の台頭に従い、演劇公演が利用の大半を占めるように。

そんな中、貸し小屋の機能に留まらない地域演劇のセンター的役割を担うべく、周年事業やプロデュース公演など自主企画にも着手。有望な劇作家や演出家、俳優、スタッフを起用し、若き才能の発掘や育成にも力を注ぐなど、当地の演劇文化を支え続けてきた。

やがて二村さんは40周年を機に七ツ寺の代表の座を後進に託すが（現代表は照明家の吉戸俊祐さん）、勇退後も「あいちトリエンナーレ」（現・国際芸術祭「あいち」）との連携作品を手掛けるなどプロデュース活動は継続している。



第28回 ニッセイ・バックステージ賞授賞式会場の
一角に設けられた、受賞者紹介コーナー

こうした長年の芸術振興への尽力が評価され、2022年に第28回 ニッセイ・バックステージ賞を受賞。ニッセイ文化振興財団が主催するこの賞は、日の目をみる機会の少ない“裏方さん”の功績を称えるもので、舞台芸術を裏から支え、舞台づくりに貢献し、優れた業績を挙げた舞台技術者を表彰対象としているものだ。



「セツ寺共同スタジオ」と二村利之さん

本好きで内向的だった少年時代

さて、そんな二村さんは如何にして表現活動に興味を抱くようになり、劇場を運営するに至ったのか、その生い立ちからお話を伺った。ご実家は名古屋市中村区の西南端、庄内川の畔にあり、終戦間近の1945年5月、防空壕の中で生を受けたという。

「横井町という町で、空襲を受けた新三菱重工業の岩塚工場が近い地域です。父は建築業、母は農業をしていて、稲藁で筵を編む内職もしていました。筵を遠くまで売りに行く時、私はリヤカーの後ろを押す役割で、帰りに駄賃をもらえるのが楽しみでした。小さい頃から本が好きで、本屋の前では本を買ってくれるまで動かなかったようです。

父が建築業を始めたのは高度経済成長の頃で、仕事が増えて潤ってくるわけです。近所の神社で小中学生の相撲大会があると、勝った子に父がご祝儀を渡していて、普段全然かまってくれないのに他所の子にはいいところを見せていたので反感を抱いていました。父は呑兵衛でしたが町内で一等最初にオートバイを買って、それに乗って颯爽と仕事場に行っていました。かなり仕事も大きくなりましたが若い衆の使い方が下手で、中途半端な形で終わりました。ですから、家庭でのある種の歪みのようなものを子ども心に感じていましたね。一度だけ、三重県四日市市の霞ヶ浦まで海水浴に連れて行ってくれて、帰りに名古屋駅前の洋食屋でご飯を食べさせてくれました。それが父との唯一の良い思い出です」

中高生時代から没頭しはじめた新聞制作

「中学生・高校生の頃は専ら新聞部の活動をしていました。ありていの学校新聞を作るのは嫌いで、自分の考えを取り入れたり、新聞というものを利用して自分の意見を書き述べる、ということをやっていました。東邦高校に進学した頃には社会的な問題も取り上げていましたね。ところが高校2年生の時に落第し留年してしまいました。部室に昼から出勤して新聞作りに励んでいたからです（笑）。再2年生では新聞部での活動を禁止されたので、当時無かった文芸部を作りました。私が本を選んで、各先生の得意分野に合わせて『レクチャーしてください』と声を掛けると先生方は喜んで話しに来てくれました。自分で言うのもなんですが、そういう企画や編集の才はあって、それが今にも繋がっていると思います。

留年後の学生生活は非常に根暗でした。勉強は相変わらずの成績で、文芸部の活動を続け、あとはひたすらお小遣いを貯めて、主に奈良に行って仏像巡りをしていました。友人も出来ました。いまひとつ馴染めず、内向的になっていたのかもしれない」

大学進学から名古屋タイムズ入社へ

高校卒業後は、仏教美術への興味もあったことから和歌山の高野山大学へ進学。再び新聞部での活動に邁進する日々を送った。

「伝統的で保守的な仏教系大学にもかかわらず、新聞部には非常に革新的な考えの持ち主がいましたね。卒業するために必要な単位は頑張って取りましたが、卒業論文が間に合わなくて“卒論留年”しました。卒業するために半年間、週に1回、名古屋から車で通って、なんとか卒論も出しました。卒論審査で、ある先生から『君はハサミとノリの使い方が上手いねえ』と言われました。本論よりも、ツギハギでそれらしく見せる編集能力を褒められたわけですね（笑）」

こうして無事に大学を卒業するも、就職するまでには1年半ほど空白期間があったという。

「半年から1年ほど、全国の祭を研究していて名古屋に本部のある『まつり同好会』という全国組織の会長の運転手兼書生みたいなことをしていました。この頃、劇作家・演出家の東由多加が結成した東京キッドブラザースの作品を観て、『ああ、芝居ってこんなに面白いんだ』と開眼しました。その後、名タイが社員を募集しているのを知って、先の会長が『地味な人だけど少しは間に合うと思うから』と、当時の社長に電話を掛けてくれました。会社からは『暇なら仕事があるから来い』と言われて、2月から会社に行き、改めて採用試験を受けて正式に入社しました」

「七ツ寺共同スタジオ」開設への序章

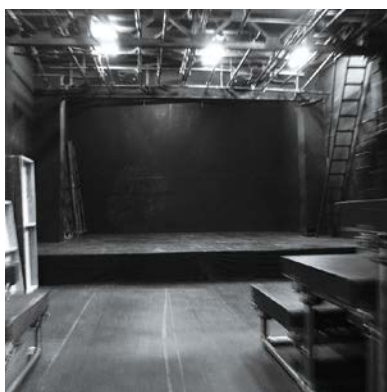
「名タイ時代に出会った一番の大物は、土方巽や大野一雄の舞台美術なども手掛け、唐十郎らとも交流の深かった現代美術家の水谷勇夫さんです。部長から、『水谷さんという面白い行動派の絵描きが何かやるというから行ってこい』と言われて取材に行ったのが最初です。水谷さんやいろいろな人と繋がりができて、後にスタジオを始めてから非常に役に立ちました。

入社2年目の頃、演劇センター 68 / 71 黒色テント『嗚呼鼠小僧次郎吉』（作・演出：佐藤信）の名古屋公演受け入れを、私的に立ち上げた5人ほどの実行委員会でやりました。2ステージで1,000人ほど入って、『こういうことに関わるのは面白いなあ』と思いましたね。そのうちに、『やっぱり場所を持たなきゃいかな』と思い始めました。場所を作るからには大須がいいなと思っていたところへ、空き倉庫で借り主を募集している、という話を聞いて早速、下見に行きました」

スタジオ誕生～黎明期

1971年2月に名タイを退職した二村さんは、工業ベルトの間屋だった物件をひと目見て気に入り、知人や兄の協力を得て賃貸借契約を交わすと、スタジオの開設準備にあたったという。

「7人の運営委員が集まって、侃侃諤諤の議論を経て準備を進めました。オープンすると、面白い空間が出来たと聞きつけていろいろなところが使ってくれたのですが、毎月家賃を払っていかなくてはならないにもかかわらず、利用料を安く設定しすぎてしま



「七ツ寺共同スタジオ」内観。
演目により客席の移動も可能な、
定員90名ほどのシンプルな空間

いました。当然経営が苦しくなって、運営委員にしわ寄せが行くわけです。それでほとんどのメンバーが抜けて、金銭的には私が責任を持って運営していくことになりました。最初の数年間は結構大変でしたね。

ある時、北村想さんから『何か手伝えることがあったらやるよ』と電話が掛かってきました。そこから2年ほど、想さんが当時率いていたT.P.O師★団が経営を肩代わりして



1977年3月6日、スタジオ名称の由来となった近くの七寺（長福寺）で結婚式を挙げ、祝宴会場のスタジオへ向かう二村さんと妻の故・むつ子さん
出典：ミニコミ大須第4号（発行／大須商店街連盟、1977年3月）

くれたわけです。この間に想さんはスタジオを拠点に才能を発揮して、ロングラン公演や新作公演を次々に打って、面白い芝居をやってくれました。劇団員の陸逸馬くがいつまさんが劇場管理を務めてくれたり、いろいろ手伝ってくれて非常に助かりました」

一時スタジオを離れていた二村さんは1977年に結婚。妻むつ子さんと共に、当時、千種区古井ノ坂にあったバー「エリオン」の雇われマスター&ママをしていた。ところが…「想さんから『ここでやるべきことはやったから外へ出たい』と連絡があったんです。それで1979年末にスタジオへ舞い戻りました」

スタジオが最も活気づいた、'80～'90年代

「1970年代の看板劇団はT.P.O師★団、1980年代に入ると天野天街の時代ですね。ある時、スタジオの前で天野さんが舞台の面白い絵を描いていました。『君が天野君か』と声を掛けると『はい、僕です』って。当時はまだ純情可憐な少年でしたね。出会ってすぐに才能のある人だと直感しました。

1980年代には、つかこうへいさんや野田秀樹さんが市民権を得ると同時に演劇の裾野が広がってきて、“アングラ演劇”と言われたものが“小劇場運動”に変わっていきました。同時に、『七ツ寺を使って演劇をやろう』という人が学生劇団だけに留まらず、OBだったり、学生の有志が学校を超えて横断的に集まったグループが続々と出てきました。それで80年代から90年代にかけてものすごく上演件数が増えていって、運営もほぼ安定してきました」

節目の周年企画とプロデュース公演

「そうなると考えるのは、やはり節目の周年には何かやらなきゃいけない、ということです。もう一つは、劇作家、演出家、

俳優、スタッフの後進育成で、その機会を作るにはプロデュース公演をやらなきゃいかんだろう、と思いました。

七ツ寺では10周年以降、15周年、20周年、以降もほぼ5年ごとに周年記念事業を行っています。一番代表的なのはやはり、20周年の1992年に白川公園で



七ツ寺共同スタジオ20周年記念公演
『高丘親王航海記』1992年11月上演／
白川公園内野外特設会場 撮影:羽鳥直志

上演した野外劇『高丘親王航海記』（脚色・演出：天野天街）ですね。澁澤龍彦さんの原作を読んで、最初の2、3章目でこれは芝居に出来る、野外劇だ、と閃きました。それも演出は天野天街しかいない、と。親王役の松本雄吉さんや維新派、てんぷくプロの参加も良かったですし、火田詮子さんも存在感がありましたね。

プロデュース公演を始めたのは、もう少し後の1996年からです。その頃スタッフになった寂光根隅の父さんの存在が大きくて、後進の育成や教育的なことも始めました。彼は横の繋がりを作るのが大変得意な人で、主宰している劇団（双身機関）の公演も含めてあちこち繋がっていきました」

七ツ寺プロデュース第2弾及び25周年記念事業として、1997年には『大須の杜のマンカイの下』（作・演出：進藤則夫）を上演。夢だったという大須観音境内での上演も実現した。以降も二村さんは、地元を中心にこれは!と思う才能ある演出家や劇作家らを起用していったが、プロデュースを行う際の指針を尋ねると以下の回答が。

「何か新しい分野を開拓する、というようなことは私はやっていないんです。テーマを決めるのではなく、まずはこの演出家や劇作家に機



七ツ寺共同スタジオ25周年記念公演
大須観音境内演劇『大須の杜のマンカイの下』
1997年10月上演／大須観音前特設会場
撮影:西岡真一①

会を与えて新しい境地を開いてほしい、ということから出発します。私が思うひと通りの才能を起用して以降は、寂光さんが継続していった形ですね」



同②

開館以降のスタジオの上演記録、周年企画、プロデュース公演については、1998年に発行された25周年記念誌「空間の祝杯」及び、2014年発行の40周年記念誌「空間の祝杯II」に詳しい（現在も入手可）。

ライフワークともいえるべき2つの取り組み

また、七ツ寺は「あいちトリエンナーレ2010」以降、3年ごとの開催時に、共催事業や特別連携事業などで参加。演劇作品の上演と共に美術展やインスタレーション展示も行うなど、「七ツ寺をアートセンターにしたい」という構想も実現してきた。さらにこの関連企画から派生し、現在まで続く二村さんのプロデュース活動として、沖縄の作家の作品を題材にした朗読劇の上演がある。

始まりは、2016年の特別連携事業「七ツ寺共同スタジオプロジェクト 往還Ⅱ ～原初の岬から～」で上演した朗読劇『ホタル綺譚余滴』だ。シマコトバ（琉球方言）と日本語による創作に取り組み続けている崎山多美さんの小説を朗読劇化したこの作品は、2017年に沖縄でも上演。2022年9月には同じく崎山作品の『ガジマル樹の下に』を朗読劇化して七ツ寺で上演。過日、2023年11月末にはこちらでも沖縄公演を敢行している。

「これも崎山さんとの出会いから始まった企画で、舞台上げることができる良い作品だと思いました。ただし、ドラマではなく朗読劇のスタイルで音楽やダンスも入れて作品を深掘りし、立体化しようと。またプロデュースできるなら、次も崎山さんの作品を名古屋で上演して、沖縄へも持っていきたいですね」

さらに二村さんにはもうひとつ、スタジオ近くで営む古本屋店主の顔も。1996年に開店した「猫飛横丁」は、若い演劇人に本を読んでもらうために始めたという。齢78を迎えた現在も意欲を持って物事に向かう姿勢は、演劇や表現活動に携わる者にとって心強く、学ぶことも多い。「店に来る人と会話するよう努めています」とのことなので、「猫飛横丁」へもぜひ足を運んでみてほしい。

※1 アンダーグラウンド（地下）演劇の略。

Report

視点

「バレエ王国・名古屋」再興へ 期待膨らむコラボ公演

コロナ禍も影響して、名古屋のバレエ団でも単独公演の難しさが増している。そんな中で注目されているのが、オーディション選抜のダンサーや気鋭の振付家らが所属団体の垣根を越えて集う合同公演やコラボレーション作品の上演だ。2023年も、内容の濃い3公演が大規模会場で催され、爽やかな才能の躍動が観客の目と心をたっぷり楽しませた。陰りが見える「バレエ王国・名古屋」だが、再興への期待を大きく膨らませたのである。

(まとめ: 桐山健一)

精彩放った新進のソロ、群舞 グラン・ドリーム・バレエ・フェス2023

上野水香、中村祥子、名古屋出身の近藤亜香ら国内外で活躍する人気プリマをゲストに迎え、東海地方の未来を担う新進ダンサーらがソロや群舞などで共演したのが「グラン・ドリーム・バレエ・フェス2023」(10月、愛知県芸術劇場大ホール)だ。出演は総勢181人、協力バレエ団・スタジオは実に64団体、ほぼ満席の観客は2日間で約4200人。主役陣の華やかなパ・ド・ドゥはもちろん、優美なソロや調和のとれた群舞も精彩を放ち、客席を幸せな空気で包み込んだ。



「グラン・ドリーム・バレエ・フェス2023」の華やかなフィナーレ

上演したのは「ラ・バヤデール」「パキータ」など4作品の名場面。振付は梶田真嗣、徳山博士、松岡璃映、市橋万樹と、今後の当地舞踊界を背負って立つ実力派。構成と展開が明快で、変形や身体表情が個性的な出演者の魅力を発揮させながらもアンサンブルを際立たせる工夫にも富んだ。

このフェスは東海テレビ放送の主催で2回目。コロナ禍たった中で舞台公演が減少していた2022年2月に初演し、観客動員が危ぶまれたにもかかわらず2日間で約4000人も来場。横断的な結集による意義深い公演は中身の充実度も高く、出演者や振

付家は当然ながら、観客からも再演を望む声が多く集まり、新たなプログラムでの上演が決まったという。

陣頭指揮を執ったのは加藤昭宏・事業局ゼネラルプロデューサーだ。東海テレビ放送は「国際的な舞踊芸術の



「パキータ」の稽古
(中央奥が振付の松岡璃映さん)

名古屋発信」を合い言葉に、「世界バレエ&モダンダンスコンクール」を1993年の第1回から2005年に愛知万博会場で開会式を行った第5回まで開催。セミオノワや上野水香、コジョカルらのほか、名古屋で精励した平山素子や米沢唯ら数々のスターダンサーを世に送り出した。この洋舞史に残る偉業に一貫して携わることでバレエへの深い知識と幅広い人脈を積み重ねた加藤が、新たに「地元根差したバレエの祭典で新進の育成を」と企画・制作したのがこのフェスだ。難問山積の公演を2度にわたって成功させたのだから、当地舞踊界の活性化に大きく貢献したのは言うまでもない。

若いダンサーにとって、高い技巧と表現力を発揮する一流ダンサーや先輩と共演できる生の舞台は、想像以上の実力が身につく。まして、憧れのプリマと同じ舞台を「生きた」という貴重な体験は何物にも代えがたいはずだ。数々の収穫と自信を得て思いのほか成長したことだろう。

清新な人選で輝く愛と成長 日本バレエ協会中部支部「シンデレラ」

日本バレエ協会中部支部主催公演「シンデレラ」(3月、日本特殊陶業市民会館フォレストホール)は、参加バレエ団が23団体、出演は約100人。再振付の松岡璃映と市橋万樹は、心優しく気な少女が愛を支えに成長していく物語を簡潔な構成と緩急に富む展開で描き、エスプリの利いた幸せな結末を輝かせた。

同支部が主催する全幕物の合同公演は、過去には主要な役が実績や発言力のある大手バレエ団に偏っている印象が強かったが、今回は主役から群舞までの全役を出演ダンサーの技巧や表現力と個性を重視して選んだという。結果、中規模バレエ団の新人らも目立ち、初々しい踊りで紡ぐファンタジーが映えた。「はかなく美しく品がある」とシンデレラ役に選ばれた池下みのりは、柔軟な身体に音楽を取り込んで伸び伸びと空間を支配し、舞踏会



「シンデレラ」

への憧れや愛の喜びなどの心象を繊細に表出した。意地悪な義姉妹の御沓紗也と高橋莉子は安定した技巧でコミカルさを発揮し、仙女の鈴木花奈や冬の精の川瀬莉奈も情感豊かにリズムを刻んだ。洗練の群舞には勢いもあり、時計の精を踊る子どもたちは愛らしい。清新な人選が心躍る舞台を現出させたのである。



「シンデレラ」の時計の精

古典の名作に新たな生命力 BALLET・NEXT「Swan Lake」

「名古屋を中心に活動するダンサーたちが所属を問わず大舞台に立てる環境を作りたい」。こんな趣旨のオーディションシステムの登録制カンパニー「BALLET・NEXT」（福田晴美



「Swan Lake」

代表)は、「Swan Lake」(1月、刈谷市総合文化センター大ホール)を上演した。「死後の世界を旅する白鳥と王子」をテーマにした小説の執筆に悩む青年と亡き恋人との現実世界と、人気バレエ「白鳥の湖」の幻想世界を交錯させた物語。機知に富む構成で深遠な愛憎をダイナミックに表出し、古典の名作に新たな生命力を注いだ。出演は山本恵里菜、野々山亮、内藤藤希、梶田真嗣ら50人超。配役も公平にチャンスが得られるオーディションで、魂の鼓動を力強く息づかせる主役級、役の個性を丁寧に表現するソリスト陣、躍動美が際立つ群舞……と、魅力凝縮の踊りを万華鏡のように繰り広げた。

現代人の感性と共振する心理描写や演劇性が特徴の脚本・演出・振付は芸術監督の市川透だ。2005年の旗揚げ公演以来、三島由紀夫の小説世界の輪廻転生観をベートーベンの音楽に乗

せて描いた「春の雪」や、児童文学の名作「フランダースの犬」が原作の「A Dog of Flanders」、近松門左衛門の心中物と歌劇「カルメン」に想を得た「落葉と薔薇」など伝統と革新を織り交ぜた意欲作に挑戦し、観客の心を的確につかんできた。2024年1月6、7日には、映画「エレファント・マン」を題材にして「人間らしく生きるとは」を活写した悲しき少女の物語「INNOCENT GRAY」を名古屋市芸術創造センターで再演する。

踊れる喜びで弾む舞台 `原石、磨く丁寧な指導

3公演に共通して印象的だったのは、ダンサーの誰もが踊れる喜びを全身からあふれさせて舞台を弾ませていたことだ。伸びやかな跳躍や回転は、人間の身体は鍛えればどこまでも美しくしなやかに、強く俊敏になることを証明するかのようでもあった。磨けば光るスター候補の`原石、たちは励まし合い、刺激し合いながら、日々の厳しい稽古に汗と涙を流している。華やかな舞台を鑑賞する度、その裏で血のにじむような努力を重ねている様子が想像できるから、感動も倍増なのだ。

「シンデレラ」と「パキータ」の振付を手掛けた松岡璃映は、出演者全員に「作品に関わることの大切さを自覚し、プライドを持って踊ってほしいと求めた」と語る。個性を生かしながらも、統一と調和が最大限発揮できるよう手取り足取り、微に入り細をうがって指導したそう。そして「稽古や本番の中で著しい成長を実感できたのがうれしい。終演後に『楽しかった』と言ってくれて、将来プロの道に進みたいと思ってくれる子が一人でも現れれば、振付家冥利に尽きる」とも。

若手の人材育成が原点 観客層拡大にも拍車を

単独で全幕バレエを上演できるバレエ団やバレエスタジオは、当地にはまだまだ多くはない。結果、才能のある若いダンサーや振付家が芽を出せないで埋もれてしまってきたのも現実だ。資金難や男性ダンサー不足などで単独公演が厳しい中、複数バレエ団のコラボレーションは「今後増えていくのは必至。生の大きな舞台、とりわけ全幕作品なら(美術、照明、音響、衣装などの)若いスタッフの育成にもつながる」と松岡や加藤は語る。「ダンサーや振付家の『今』を最大限輝かせるのが我々の使命。壁を取り払った協力の強化が求められるし、内容の充実も不可欠」と話すバレエ団主宰者も少なくない。

決意も新たにしのぎを削るダンサーたちが、高度な技巧と表現力を習得して大きく羽ばたき、多くの振付家が斬新な意欲作への挑戦で実績を残すのを期待している。舞台に関わる全ての人材育成こそが舞踊界の隆盛への原点だし、個々のバレエ団やスタジオの底上げにもつながるのは間違いない。

加えて、完成度の高い作品の上演でバレエ芸術の魅力を積極的に発信し、幅広い層の人々が公演会場に足を運ぶ環境を作る努力にも拍車をかけてほしいと願っている。熱心な観客の「温かくも厳しい目」が、舞台人を鼓舞して「大きく育てる力を持っている」と信じて疑わないからである。(文中敬称略)

※写真はいずれも杉原一馬氏撮影

#zoom up

ズーム・アップ

常磐津奏者

ときわ つつな ほう 常磐津綱鵬さん

高校生の時に「名古屋むすめ歌舞伎」に入団し、女流歌舞伎役者として活動後、常磐津奏者に。艶やかな声から軽快な声まで幅広いキャラクターを一人で演じ分け、聴きやすい唄や語りで、舞台人はもとより、初めて常磐津を聴く人たちからも好評を得て、名古屋市文化振興事業団第39回芸術創造賞を受賞。美濃路街道に活気を取り戻すため地域密着型のカフェを作り、自らもカフェに併設した舞台で演奏するなど、様々な角度から名古屋や周辺地域の文化芸術を盛り上げようと活動している常磐津綱鵬さんをズームアップ！（聞き手：杵屋六春）



歌舞伎の世界へ

南区道徳の祖父宅に遊びに行くと、いつも歌舞伎やチャップリンの無声映画などのビデオが流れていて、それを横目で見ながら遊んでいました。知らず知らずのうちに影響を受けていたのが、高校1年生の時に、名古屋まつりの市民KABUKIに自ら応募し、参加しました。そこで学んだ、“普段の動きに100倍のパワーを入れて手を出す”“お腹から二文字目を強く出しながら円を描くように声を出す”“見得を切る”など日常からかけ離れた所作がとてもかっこよく、周りを驚かせたいという自分の思いと一致しました。華やかなヘアメイクで舞台に立つこともでき、あつという間に歌舞伎の世界に魅了されました。市民KABUKIが終わった後もこのまま歌舞伎を続けたいと思い、「名古屋むすめ歌舞伎」（以下むすめ歌舞伎）に入団しました。

今振り返ってみると、私は歌舞伎の道に、姉はパントマイムの道（クラウンとして活躍するLONTOさん）に進んでおり、きっかけはやはり祖父だったのかなと思います。

その後も私の青春時代はどっぷり歌舞伎でした。その中でも特に印象に残っているのは、若手が主役を務める自主公演で「神霊矢口渡」という演目の六蔵という役柄をさせていただいたことです。三枚目の役どころなので、お客さんが笑って喜んでくれるんです。演じることが本当に楽しいと感じました。



10代の時「神霊矢口渡」

子どもの頃の綱鵬さん

子どもの頃はおとなしく、言葉で自分の想いを伝えることが得意ではありませんでした。絵を描くことが大好きだったので、絵に秘めた感情を表現していました。よく似顔絵を描いて友人や先生に褒めてもらえることが嬉しかったですね。



幼少期の綱鵬さん

転換期になったのは小学6年生の時です。授業中に友人とけんかになり、自分の感情をさらけ出したことで、殻が破れたような感覚がありました。“今まで何を恥ずかしいと思っていたのだろう”と突然人の目が気にならなくなり、生徒会長に立候補するまでになりました。その選挙演説で昔流行していた「アタックナンバーワン」の替え歌を歌いながら踊り、周りを驚かせたのは良い思い出です（笑）



小学6年生の時に描いた似顔絵

一旦は離れた芸能の道

20代前半まではやりたいという気持ちだけで突き進んでいましたが、次第に歌舞伎だけでは食べていけないと悩むようになりました。ちょうどその頃、似顔絵師という仕事を知り、もとの絵の能力を生かして、2足のわらじでの生活を4年ほど続けました。ありがたいことに似顔絵師としての仕事も忙しくなりましたが、今度はどっちつかずの自分に不安を感じ、歌舞伎と似顔絵のどちらかを選ばなければいけないのではと悩んでしまいました。

将来に漠然とした不安を感じていた時、家族でトルコに旅行に行きました。その時に見たエーゲ海がとても美しく、「なんて世界は広いんだ…」と感銘を受けました。まだ自分の知らない世界がたくさんあることに気づき、悩みが晴れていくような感覚だったことを鮮明に記憶しています。「もっと違う道もあるかもしれない、少しこの世界から離れてみよう」と26歳の時にむすめ歌舞

伎を退団しました。そこから4年間は芸能の道から離れ、東京で似顔絵師の仕事の続けました。



東京デザインフェスタにて

可能性を感じた常磐津の道

30歳になり名古屋に戻ってきたタイミングで、もともと歌舞伎の一環として学んでいた常磐津を本格的に学ぼうと、常磐津綱男師匠に再度入門しました。常磐津は“聴く歌舞伎”とも言われているので、今まで教えていただいたことを活かせるな、という思いがありました。



「竜潭譚」(人形劇場ひまわりホール)

5年間くらいは発表会の出演など限られた場所での活動が主でしたが、似顔絵師をしていた頃の友人が妖怪をテーマにした展示を開催することになったため、「三味線で何かテーマに合うものを演奏してほしい」と依頼されました。その際に平安時代の武将の渡辺綱と鬼女を題材にした「戻橋」という曲を弾き語りしたのがきっかけで、その後も落語の似顔絵イベントの前座に呼んでもらうなど、似顔絵と常磐津の繋がりを嬉しく思うと同時に、常磐津の可能性を感じました。

また、演出・脚本家の故・木村繁先生は私の夢だった、常磐津を弾き語りで全国各地へ伝え広めていくという世界を開いてくださった大切な方です。先生に、異ジャンルの方々と結成した「ブッペンテロル」の人形とパントマイムとの浄瑠璃台本を書いていただき、毎年新しい試みの舞台に挑戦しています。

常磐津の正式な舞台は三味線方と浄瑠璃方に分かれており、普

段は浄瑠璃方として活動していますが、こういった活動のおかげで、古典以外の様々な場所で演奏させていただく機会が増えました。最近では演劇の舞台や日本舞踊の公演などにも声をかけていただけるようになりました。異ジャンルの方々との共演はとても刺激になります。



故・木村繁さんと(名古屋市芸術創造賞授賞式)

挑戦は続く

2020年には地域の人たちにも芸能を身近に感じてもらいたいと、築127年の古民家をリノベーションし、檜舞台(MINOJI BASE)を併設したカフェ「カフェ&ギャラリー みどりや」を清須市の美濃路沿いにオープンしました。

常磐津などの伝統芸能は敷居が高いというイメージかもしれませんが、カフェに来たついでに気軽に触れてもらうことができますし、地域の人々の声を聞くこともでき、視野を広げることに繋がっています。このカフェで落語や篠笛など、常磐津以外の公演も行い、地域の文化交流や発展の場所にしていけたらと思っています。

市民参加のイベントがきっかけでこの世界に入った自分のように、ささいなことから興味を持つ人が増えていき、伝統芸能が次の世代に繋がっていくことを願っています。好きなことを仕事にできるものだ伝えていきたい。あとは純粋に常磐津愛好者を増やしたいという想いもありますね。

英語による常磐津弾き語り配信で世界に日本の文化を知ってもらったり、泉鏡花ゆかりの土地を巡りながら、弾き語りで全国ツアーをしたいなど、数え上げたらキリがないくらいやりたいことが満載です。今後の活動にもぜひご注目いただけたら嬉しいです。



MINOJI BASEオープンイベント

名古屋市文化基金事業

あした きみの

原作／竹内裕二
作曲／藤田麻衣子
上演台本・演出／落石明憲
音楽監督・指揮／井村誠貴
振付／高橋早霧
管弦楽／セントラル愛知交響楽団

あの感染症で
奪われた高校生活。
夢や想いをあきらめ
大人になったきみたち。
運命の再会に
止まっていた時が
動き出す。

名古屋文化振興事業団設立40周年記念 2024年企画公演



2024年 2月16日(金) 17日(土) 18日(日)

※開演は45分前。13:30～、18:30～ 11:30～、16:30～ 11:30～、16:30～

全席指定 S席(1F) [一般] 4,000円 [友の会・障がい者等・大学生以下] 3,600円
A席(2F) [一般] 3,000円 [友の会・障がい者等・大学生以下] 2,700円

会場 | 名古屋市芸術創造センター



オリジナルミュージカル「きみのあした」は、
競輪の補助を受けて実施します。

- 名古屋市文化振興事業団チケットガイド
052-249-9387 (平日9:00～17:00/郵送可)
- 名古屋市文化振興事業団が管理する文化施設窓口
(土日祝日も営業)
※工事休館等がありますので、ウェブサイトをご確認ください。
- 電子チケット
※一般のみ取扱い



「なごや文化情報」に関するアンケートのお願い

下記の質問にご回答いただき、メールフォーム、FAXまたは郵送にて**2024年2月22日(木)**【必着】までにお送りください。ご回答いただいた方の中から**抽選で20名様に名古屋市文化振興事業団の主催事業鑑賞補助券500円分をプレゼント**いたします。
※当選の発表は景品の発送をもって代えさせていただきます。お預りした個人情報につきましては、当該アンケートの事務連絡のみに使用させていただきます。

【宛て先】〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 ナディアパーク8階
(公財)名古屋市文化振興事業団 文化情報アンケート係
FAX: (052) 249-9386 Email: tomo@bunka758.or.jp

- 内容についてどう思われますか。
①よい ②まあよい ③あまりよくない ④よくない
- 「なごや文化情報」の中で関心を持つ記事はなんですか。(複数回答可)
①表紙 ②Pick Up Gallery ③随想 ④この人と… ⑤視点 ⑥#zoom up
⑦1年をふりかえって(Spring号のみ掲載)
- 今まで「なごや文化情報」をお読みになって感じたことをご記入ください。
- 今後「なごや文化情報」で取り上げてほしい話題やコーナーがありましたら、ご記入ください。
- ご回答いただいた方の
①お名前 ②性別 ③年代(30代など)
④郵便番号 ⑤ご住所 ⑥電話番号

メールフォームで
簡単回答!
QRコードからアクセス



頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー



アートディレクター



印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 <http://www.kp-c.co.jp>

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

← 20Hz → 20kHz →

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市中区栄三丁目2番9号
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

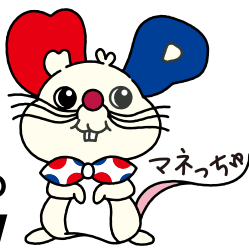
舞台音響・映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

MANAGEMENT PRO
株式会社 マネージメント・プロ



〒461-0004 名古屋市中区東区葵2-11-22 アバンテージ葵ビル301
TEL: (052) 508-5095 FAX: (052) 508-5097 Web: www.mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

- ◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
- ◎毎月24,000部発行
- ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM等にて配布

E-mail: mane-pro@mane-pro.com